

藤七温泉

混浴の課題に対するある宿の解決策

藤七温泉の目玉は、八幡平のゴツゴツした噴煙の上る山腹に並ぶ、自然と融合している混浴の大露天風呂です。お風呂に入ってしまうとお湯自体は乳白色で不透明ですが、道路から浴場が見えるため、脱衣所から風呂に入るまでがややハードルが高いと感じる人もいるかもしれません。

このように浴槽が露出していることには、実際的な理由があります。第一に、密閉された建物は危険なガスを閉じ込めてしまう恐れがあります。第二に、雪が降る時期に解体できるよう、建物は最小限に抑えられています。そして第三に、囲いが少ない方が、入浴客は壮大な景色を楽しむことができます。

藤七温泉の経営者阿部孝夫さんは、利用客が安心できるのであれば、身体を隠して入浴することに大賛成です。「バスタオルを身体に巻く方が多かったのですが、それでは不便なこともあるので、タオルの会社を見つけて自分でタオル地から湯あみ着を作り始めました。最初は普通の家庭用ミシンを使っていたものの、生地が厚いためすぐ壊れてしまうのです。結局、工業用ミシンを購入したのですが、以来作るのがとても楽になりました」と彼は言います。

現在、孝夫さんは手作りの湯あみ着を年間約 1,000 枚販売しています。男性利用客の要望と環境

省の混浴プロジェクトに後押しされ、2022 年にはタオル地の男性用キルトもラインナップに加わりました。

宿が休みになる冬の間、孝夫さんには湯あみ着を縫う他にもすることがたくさんあります。近くの鹿角市にある事務所を拠点に、翌年のメニューを考え、食材調達の手配をし、営業業務をこなします。

「12 月から旅行会社を通じて団体予約を受け始め、1 月から個人予約を受け付けます」と孝夫さんは言います。「祝祭日はいつも真っ先に予約が埋まります。4 月は道路の両側に雪の大壁がそびえる『雪の回廊』を見に来る人でにぎわいます。それから、6 月には氷と雪が溶けて鮮やかな青色の池の真ん中に、白い雪の輪に囲まれた青い水が丸く出現し、巨大な目のように見えると言われる『ドラゴンアイ』を見に来るお客さんがいます」と孝夫さんは言います。